図版解説

平成二十一年度に寄贈された黒田清輝作品について
――《舟》《芍薬》《日清役二龍山砲台突撃図》《林政文肖像》二点――

山梨絵美子

平成二十一年度に黒田記念館での保管、展示を希望するという特記事項を添えて、東京国立博物館に黒田清輝の作品五点が寄贈された。寄贈作品は以下の通りである。

《舟》　三二・五×四五・五cm　カンヴァス・油彩
《芍薬》　一九〇四年　三四・八×二六・〇cm　板・油彩
《林政文肖像》　一八九四―九五年　二五・三×一八・四cm　紙・鉛筆
《林政文肖像》　一八九四―九五年　長辺八・五cm　紙・インク
《日清役二龍山砲台突撃図》　一八九四年　一六・〇×二四・二cm　紙・鉛筆・インク・水彩

上記作品は来歴により大きくふたつに分かれる。《舟》（図版1）、《芍薬》（図版2）はいずれも黒田清輝から妹の峯（峰子、美弥）に贈られたものである。黒田清輝は黒田清兼を実父、八重を実母とするが、実父の兄清綱の養嗣子となった。清綱には千賀子、清秀、直綱という子があり、清輝にとって兄弟ということになるが、実際に同じ父母から生まれた兄弟は峰子のみであった。峰子は北村弘尭に嫁し一女、敏子を産む。敏子は南家へ嫁し、一男一女を産む。《舟》は敏子のご令嬢に伝わり、《芍薬》はご令息に伝わっていたが、このたびの寄贈により再び一箇所に所蔵されることとなった。

一方、二点の《林政文肖像》（図版3、4）と《日清役二龍山砲台突撃図》（図版5）は、肖像画に描かれている林政文の孫に当たる方から寄贈された。林政文は、日清戦争に記者として従軍し、後述するように黒田清輝と行動をともにした。三点の作品は、黒田から林政文に贈られ、その後、政文の遺族のもとにあったものである。政文の長男にあたる林政武の著書『緑地帯』[1]の口絵として掲載されている。

以下に、それぞれの作品の制作年などについて基礎的な考察を試み、黒田の画業の中でどのような位置にあるかを素描してみたい。

舟について

《舟》（図版2）はカンヴァスに油彩で、画面右下から左上に向かって川面に浮かぶ小舟を俯瞰して捉え、画面上方に向こう岸を描いた作品である。全体に青灰色がかった色調は黒田のフランス留学期の作品と通い合う。画面上にも木枠等にも年記、サインは認められない。「黒田清輝先生遺作展覧会目録」（東京美術学校、一九二四年十一月五日―十五日）には「参五八　舟　北村峯子殿」とあるが、この目録には図が掲載されていない。この展覧会をもとに編集された『黒田清輝作品全集』（和田英作編　審美書院　一九二五年三月）には「三二九　舟　北村峰子君」とあって、単色図版ながらこの作品と認められる図が掲載されている。来歴と図柄が一致するところから、このたび寄贈された《舟》は『黒田清輝作品全集』に掲載された図と同じものと考えられる。同作品集には制作年は記載されておらず、当時から不詳とされていたことがわかる。

黒田が残した写生帖が多数残されており、その中の〈写生帖二十一号〉にこの作品のもととなったと考えられるデッサンがある（挿図1）。〈写生帖二十一号〉の表紙裏には「1889」「1890」と黒田の手書きと思われる書き込みがあり、一八八九年末から一八九〇年頃に用いられたものと考えられる。当該のデッサンがその中にあるところから、《舟》もその頃の制作と推測される。油彩画と写生帖にあるデッサンとでは、櫂の位置がやや異なり、また、写生帖にある図では、船尾まで描かれていて、描き手は水辺に居て、水に浮かぶ舟を見ていると推測されるが、油彩画では船尾が描ききれていないため、描き手が船尾に立って俯瞰しているかのような捉え

方となっている。

《舟》の赤外線画像（挿図2）では、油絵具で描かれている舟よりも一回り大きい舟が画面右下から左上に斜めに描かれ、ほとんど舳先が向こう岸に届きそうになっている。筆致から、赤外線画像に見えているのは木炭の下描きと推測される。赤外線画像では、写生帖にある図のように画面のかなり左上まで舟を描いているが、写生帖よりも油彩画のほうが舟を上から見下ろしてとらえているため、向こう岸が近すぎて、遠近感に破綻を来している。それを、油彩画では調整し、舟の舳先をやや右下に描きなおしている。《舟》は一見、作者が目にした情景をそのまま描いたかのように見えるが、写生帖に入念な描きこみのあるスケッチが残され、赤外線画像から、カンヴァスに下描きを描き、油彩で描き出してからも何度か修正したことが明らかになることから、あらかじめ何か意図するものがあって描かれたと推測される。

一八九一年、サロン・デザルティスト・フランセに《読書》で初入選を果たした黒田は、翌年のサロン出品をめざし、一八九一年から翌年にかけて、風景の中に女性群像を配した《夏図》を構想し、そのためのデッサン、下絵を描いている（挿図3）。この作品は、「水辺で女性が寝転んだり、話をしたりしているところ」[2]を描いたもので、湖に連なる野原という場、および女性のポーズなどの類似から、コランが一八八四年のサロンに出品した《夏》に啓発されたところが大きいと思われる。写生帖に見られる《夏図》のための構図と思われる一図には、舟をこぐ女性が登場しており、そうした図との関係も推測される（挿図4）。なお、《夏図》のためのデッサン、下絵には、一九〇七年に描き始められ、一五年まで筆を入れられ続けた《花野》（挿図5）に似通ったものがあり、水辺に憩う女性群像の情景が、黒田にとって長らく描きたい画題であったことがわかる。

舟の絵を描いたという記事は『黒田清輝日記』他、黒田の自筆文献には見出せな

挿図1　黒田清輝〈写生帖21号〉より　東京国立博物館

挿図2　黒田清輝《舟》 赤外線写真（撮影　城野誠治）　東京国立博物館

挿図3　黒田清輝《夏図画稿》 東京国立博物館

挿図4　黒田清輝〈写生帖9号〉より　東京国立博物館

い。しかし、一八九〇年八月八日にグレー＝シュル＝ロワンから父に宛てた手紙に、

田舎ニて一番愉快を覚え候ハ夜食後舟ニて川をあちこち致すニて御座候　其川ハ川と申ても上下ニ水車場有之候間溜り水の如ク相成居流れ至而静ニ候　夷人の奴等夜舟ニて月を眺むると云様な楽を知らぬニや夜ハ舟ニて出掛る者無之宿屋の庭先ニつなぎある小舟ハ私共丈の用ニ相立申候　仕合の事ニ御座候[3]

挿図5　黒田清輝《花野》　東京国立博物館

とあって、黒田が一八九〇年の夏にグレーに遊び、宿の裏を流れるロワン河に舟を浮かべて楽しんだ様子が伝えられている。

《舟》はこうした舟遊びなどを含む、夏の野の憩いを女性群像によって描き出す、より大きな作品のための試みであったかもしれない。向こう岸に《野原の木立》《原》《枯れ野原》といったグレーでの諸作にとらえられた景色が違和感なく広がっているように感じられる。

芍薬について

《芍薬》（図版2）は板に白色を塗って下地とし、その上に油彩で花の肖像のように芍薬をとらえた作品である。画面左下に「S. K」とあるが制作年の記載はない。板裏に「黒田清輝　紀念　明治三十七年　北村弘堯殿　峯子殿　清輝」とある（挿図6）。「黒田清輝」「峯子殿」は墨線によって消されている。文字は「黒田清輝紀念　北村弘堯殿　峯子殿」と「明治三十七年　清輝」とでは筆跡がやや異なるが、いずれも黒田自筆と思われる。「黒田清輝先生遺作展覧会目録」（東京美術学校、一九二四年十一月五日―十五日）には「参五七　芍薬　一九〇四年　北村峯子殿」とあるが、図の掲載はない。『黒田清輝作品全集』（和田英作編　審美書院　一九二五年三月）には「三二八　芍薬　一九〇四年　北村峰子君」とあって、単色版ながら、この作品と同じ図柄の図版が掲載されている。裏板の文字は明治三十七年に黒田が北村夫妻（挿図7）に記念として贈ったように読めるが、それが制作年を決定する根拠にはならないであろう。が、遺作展覧会時には黒田の画業をよく知る友人、弟子が多数存命であったから、これらに記載されている制作年は全く根拠のないものではないはずである。

灰色を含んだピンク、緑、白の色調は、一九〇一年に黒田が二度目のフランス滞在中に描いた《裸体婦人像》の背景と共通する。一八九〇年代の黒田の作品は、青や緑などの寒色系の色を多用するが、一九〇〇年以後は暖色系へと色調が変化する。《芍薬》は暖色系に移行してからの作品と考えられる。「明治三十七年」に峰子

に贈られたとすると、制作は二度目の渡欧からの帰国後、すなわち一九〇一年からこの作品が贈られた一九〇四年の間と考えられる。一九〇四年（明治三十七）五月二十九日（日）の日記に「午後三時頃黒田清二氏及山本翁ノ妻君来訪　山本ノ妻君ハ二時間程語リタリ　後チ芍薬ノ花ヲ描カントシテ筆ヲ執リ十五分間斗ニテ中丸君来訪」とあり、翌三十日（月）の記述に「午後二時過ヨリ昨日着手セル芍薬ヲ描ク」とある。また、同年六月二日（木）には「本日ハ午後ニ於テ先日着手セル芍薬ノ図ヲ仕上ゲ又新ニ今一ツ同花ノ写生ニ取リ掛リタリ」とある。翌六月三日（金）には「少シク文蔵様ノ御肖像ノ修正ヲ試ミ亦第二ノ芍薬ノ図ヲモ描キタリ」とあって、この頃、黒田は芍薬を好んで描いたことがわかる。[4] 本図がこの記述のいずれかに相当すると決するだけの証はないが、遺作展目録や作品全集の記載などを勘案し、本図の制作年を一九〇四年としておきたい。

なお、同年七月三十一日に養母貞子が死去しており、その葬儀などで黒田は峯と会っていると推測される。同年十月十五日の日記には「笄町邸ニ於テ昼食　来会者姉上　乾　峯等也」と名を見出すことができるが、[5] 作品贈与の件は記載されていない。

黒田は自邸内に温室を持っており、《温室花壇》にも描いている。花は好みのモティーフで、花そのものが主要なモティーフとなることも多く、また、庭や野原を描いた作品にもよく花が登場する。黒田は、ユリ、薔薇、芥子、菊、グラジオラス、石楠花、芙蓉、芍薬、つつじ、たんぽぽなど描いているが、晩年になると日本の花が多くなる傾向がある。芍薬を描いた例としては、鉢植えのつつじと芍薬の傍らに座る猫を描いた《花と猫》などが挙げられる。この作品のように、黒田は花を描く際、切花よりも地面や鉢植えに根を張った状態で開花した様をとらえることが多い。

一九〇〇年パリ万博に出品された《木陰》に描かれた大輪の白百合のように、黒田は西洋のイコノグラフィーを踏まえて、花に象徴的な意味を託すことがあった。[6] 第一回文展出品作《白芙蓉》なども、花をつけた白芙蓉の木を背景に、斜め向きの裸婦の半身を描き、花と女性のイメージを呼応させた作品と言えよう。芍薬は牡丹やユリとともに女性の形容に用いられるだけに、実妹に贈られたこの作品には何かしらの象徴性が付与されていたことも考えられる。

日清戦争関係の作品

二点の《林政文肖像》と《日清役二龍山砲台突撃図》は、黒田清輝から林政文に贈られ、林家に伝わったものである。

挿図6　黒田清輝《芍薬》　額裏面の書き付け　東京国立博物館

挿図7　北村夫妻と敏子

《林政文肖像》のうち、鉛筆で描かれたもの（図版3）は支持体となっている紙の裏に黒田による「Portrait de Mr M. Hayashi, exploralear de correspondant de Mainichi Shinbun de Tokio」との書き込みがあり、表に久保田金仙による林政文肖像が貼り付けられている。金仙による肖像には「明治申午十月二十日　於薩摩丸写為林雅兄情嘱　金仙久保田筆」とあり、一八九四年十月二十日に薩摩丸船上において林のために描かれたものであることがわかる。黒田が林と出逢うのは、後述するように同年十二月であるから、金仙の作品は鉛筆による黒田の肖像画が描かれた際にはすでに林の手元にあったと考えられる。

黒田による林の肖像は「S. K」のサインを伴うものの、年代表記はない。画用紙に鉛筆で描かれた肖像（図版3）と縮緬状の半透明の紙にインクで描かれた肖像（図版4）とは著しい類似性を持っているが、大きさが異なる。鉛筆画の方が初発性を感じさせる。林家遺族のもとに残された政文の写真（挿図8）との比較によって、これらの肖像画の肖似性が明らかになる。

黒田清輝と日清戦争については、隈元謙次郎氏によるいくつかの論考があり、そこに林政文の名も見えるが、その人物について詳述はされていない。[7]

林政文は一八六九年（明治二）に信州に生まれ、八歳で家督を継いだとされる。

挿図8　林政文

商科大学の前身となる高等商業学校に学ぶが、学校騒動を起して同志とともに中退。郷里信州出身の思想家佐久間象山に私淑し、一八九三年（明治二十六）十二月には二六九ページにおよぶ著書『佐久間象山』を開新堂から刊行している。一八九四年（明治二十七）一月に当時外務大臣であった大隈重信の知遇を得、清国商業視察を委嘱されて、単身、上海に渡った。当時の状況から日清間に事のあるのを予測し、中国人に変装して北京に潜入、時の代理公使小村寿太郎の家にしばらく寄食していたという。日清戦争勃発により、東京毎日新聞の従軍記者として大山巌大将の率いる第二軍に従軍し、後に征台軍とともに台湾に渡った。台湾では自ら台湾興業会社を起したが、北國新聞を経営していた実兄が一八九八年九月に肺病により死去し、政文に新聞社を譲ると遺言していたため帰国して北國新聞二代目社主となった。しかし、翌年、政文はフィリピン独立運動の指導者エミリオ・アギナルドを支援するため、日清戦争で用いた武器弾薬を大量に輸送する義援軍に参加し、その中心的人物のひとりとなった。一八九九年七月十九日、政文一行は布引丸に武器を積んで長崎を出帆し、二十一日に寧波沖で台風にあって遭難する。布引丸は沈没し、乗員は三艘に分かれて避難した。そのうち二艘は中国大陸に漂着したが、船長と主要な荷物を積んだ最も大きい船が行方不明となり、船長以下十九名の生死が不詳となった。政文も行方不明者のひとりで、三年間、帰りを待たれていたが、一九〇二年七月に死去したものとして葬儀が行われている。この事件は「布引丸事件」として知られ、中古船であった布引丸の安全性とその調達を巡る疑惑などから、当時、紙面を賑わした。[8] フィリピンは当時アメリカの統治下にあり、この事件は、欧米列強による侵略にアジアの力を合わせて抵抗しようとした一面を持っている。

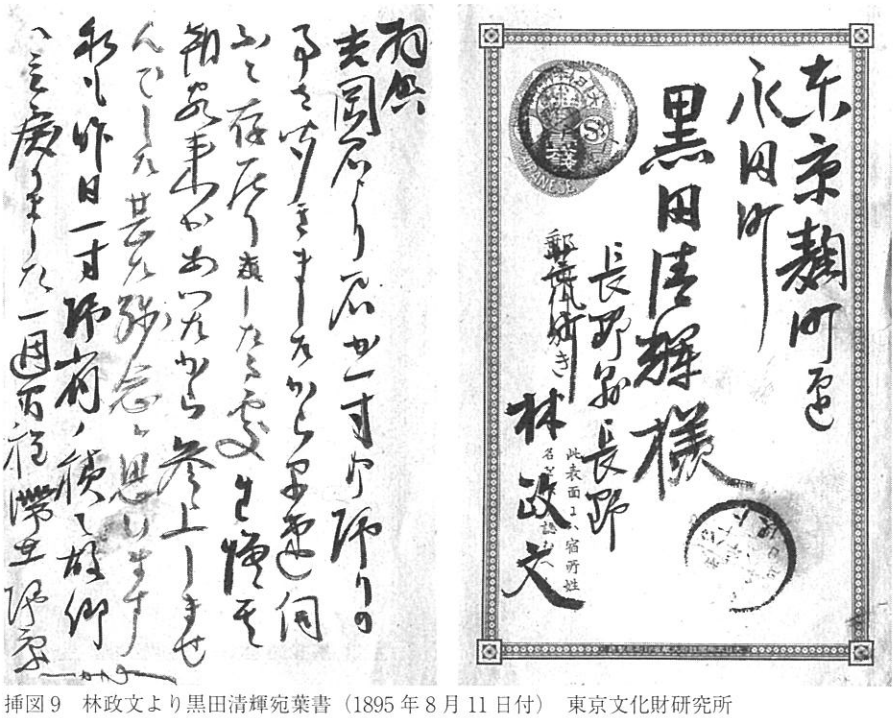
こうした風雲児であった林政文に、黒田は日清戦争従軍時に出会った。黒田は一八九四年十一月二十四日、旅順口陥落の報を得、同月二十九日に広島の宇品港を出発し、十二月四日に大連に到着、同日中に主な滞在地となった金州に着いている。林政文に関する『黒田清輝日記』[9]の記述は、一八九四年十二月二十八日に初めてあらわれ、「昨日より仲間が一人増た　其人ハ東京毎日新聞の林政文氏也」とあるところから、黒田と林の出会いは、同年十二月二十七日であったと思われる。周知のように、日清戦争には徳富蘇峰の主宰する「国民新聞」の記者として国木田独歩が

従軍しているほか、正岡子規、浅井忠らも戦地に赴いたことが知られるが、黒田が行動を共にしたのは、画家山本芳翠や林政文であったらしい。以下に『黒田清輝日記』にあらわれる林関係の記事をあげる。

一八九五年一月二日「今朝林政文君ト戦死者ノ墓ヲ弔ヒ其墓所の図ヲ写ス　又今日軍司令部及行政庁等の図ヲ作ル　二枚ハ林君ノ為一枚ハ奈良崎氏ノ為也」

同年一月七日「金州繁盛の図ヲ描き始む　其画の為め夜一時半迄起て居た」

同年一月八日「昨日かき懸た画をかいて仕舞ヒ林君ニ渡ス　毎日新聞へ送る為也」



挿図9　林政文より黒田清輝宛葉書（1895年8月11日付）　東京文化財研究所

同年一月二十一日「林　大阪　萬朝の諸氏ト臥龍村より成山廟ニ到」

同年一月二十二日「夜中大砲ノ音聞ユ　昨夜今朝出立ノ命下リタルニ依り其仕舞ヲシテ待テ居タレド議が変ジテ日延ト為ル　故ニ林　時事　大阪　萬朝　山本等ト燈台見物ニ行タ」

同年一月二十四日「高安　林　矢島　大阪君等ト北海岸ノ一漁村ヨリ一と廻りして東方ノ成山廟ヲ見　断崖ノ上ヲ龍王宮迄到ル」

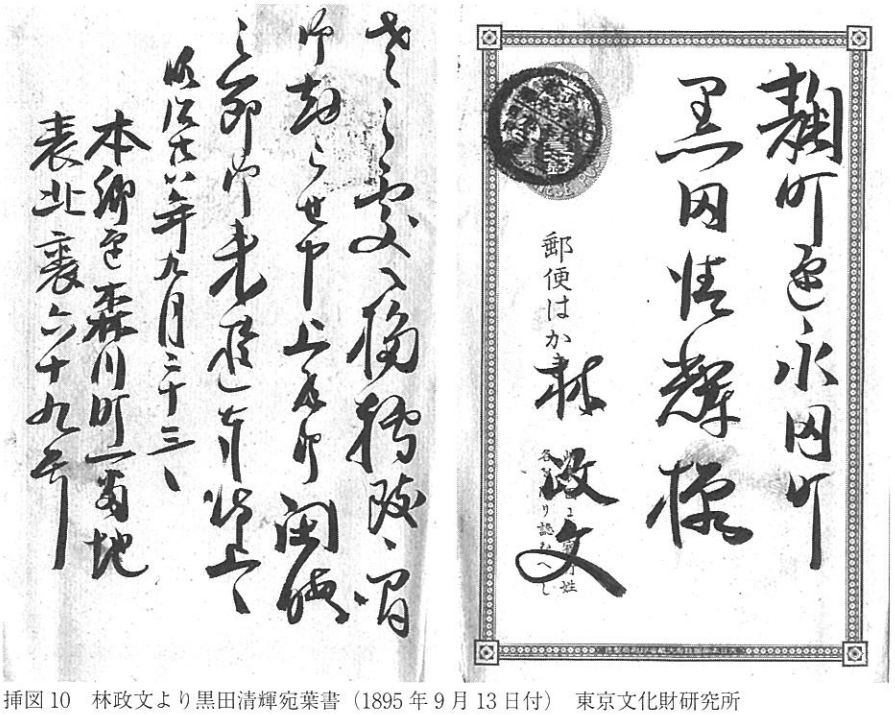
同年一月三十日「昨夜十時頃伝令使が来て明午前四時半ニ司令官出陣のよし申来る（略）我々ハ張家口ノ右方ニ見ユル石堂有ル山ノ上ニ居テ戦状ヲ見ル可シと云命故其山ヲ当ニ出懸ク（略）仕方ナク林君が先登ニテ前ニ見える山に人影ノ見ユルヲあてニ雪に足をすべらしながらもよぢ登る」

同年二月九日「山本　林の二氏昼めしを食て直ニ威海へ立つ」

林らが威海衛に出発した翌々日の二月十一日、黒田は寺内少将に誘われて朝八時に出発、午後三時頃に蔭山口から錦川丸という小蒸気船に乗り、二月十三日に万国丸に乗り移り、二月十六日に帰国している。

帰国後も林との連絡はあったらしく、一八九五年八月十一日に長野から「東京麹町区永田町　黒田清輝様　長野県長野荒町　林政文」の表書きで「拝啓　吉岡君より君か一寸御帰りの事を聞きましたから早速伺ふと存居りましたる処生憎其朝客来かあつたから参上しませんでした甚だ残念に思います　私も昨日一寸帰省ノ積て故郷へ立戻りました　一週間程滞在帰京します」という文面の墨書による葉書が寄せられ（挿図9）、一八九五年九月二十三日にも「本郷区森川町一番地表北裏六十九号」に転居した旨の葉書が黒田宛に寄せられている[10]（挿図10）。

一八九六年一月六日消印の年賀状は「京都円山公園内松原写真館方　黒田清輝様」の表書きで「謹賀新禧　併謝平素之疎音　尚々将来之厚情　東京本郷区森川町壱番地六十九号　明治丙甲吉旦　林政文留守宅」と墨書されている。同年五月五日（火）の黒田清輝日記に「十時頃ニ西園寺さんへ行たら出勤をしかゝつて居らるゝと云事故其儘引取り上野に行たら岡倉氏ハ不在　夫れから森川町の林政文をたづねた　同人ハ四五日前ニ台湾から帰つたのだ　金州ニての話から又京都の話などが出た　林



挿図10　林政文より黒田清輝宛葉書（1895年9月13日付）　東京文化財研究所

ハ今度帰り掛ニ京都へ寄つたとの事　飛烏山の扇屋で昼めしを一緒ニ食ひ四時頃ニ大学の前で別れ序ニ Revon をたづねて逢つた」[11]とあり、同年五月八日（金）の記述にも「これから衆議へ出懸やうと云処ニ林政文が来たので一寸話をした　大西庄のカラリヤンの中でかいた営城湾の雪の景色の画など紀念としてやつた」[12]とあって、頻繁な行き来が見て取れる。

同年六月十一日には「台湾基隆」にいる林から麹町区永田町の黒田へ「去る九日此地へ省船致候」との墨書の葉書が寄せられている。[13]

一八九八年六月七日には台湾から帰国し東京の本郷に居ることを伝える墨書の葉書が「麹町永田町　黒田清輝様　本郷弓町二丁目二十番地　林政文」「拝啓　台湾より生儀一昨日帰京　本月中在宅候居間御閑暇之折りには御来訪願上候　六月七日」という文面で寄せられている。

東京文化財研究所の所蔵する林の生前の黒田宛書簡は以上五通で、一九〇二年に林政文の養父林政通から政文葬儀に際しての書簡が黒田宛に届いている。布引丸遭難から三年経っても本人が戻らぬため、葬儀を行なったことを告げる挨拶状と二等運転士による遭難の様を伝える談話が印刷物として同封されている。

数奇な運命の風雲児と黒田が、一八九四年末に出会ってからわずか四年半ではあったが交遊があった事実は興味深い。

《二龍山砲台突撃図》（図版5）は戦闘図の例が少ない黒田の画業の中で、興味深い一点である。戦地に赴きながら、黒田がとらえているのは滞在した土地の風景や行軍の様子、捕虜などで、戦闘場面はほとんどない。

画面左下に黒田によるペン書きで「à mon ami Hayashi souvenir cordial S. K. Décembre 1894」とあり、裏面右端に縦書きで「我兵二龍山砲台へ吶喊前進之図」と墨書があることから、描かれているのは日本軍による二龍山砲台攻撃の場面で、一八九四年十二月に黒田が林に記念として贈ったものであることがわかる。画用紙に鉛筆、インク、水彩で描かれている。

日本軍が二龍山砲台に突撃したのは一八九四年十一月二十一日の旅順戦でのことで、同日中に旅順口は日本軍によって占領された。先にも見たように、黒田はその報に接してから日本を出発しており、二龍山砲台での戦闘は実見していない。

先に挙げた戦地での黒田清輝日記からもわかるように、従軍記者たちには戦闘開始時間と場所が伝えられ、戦闘中の取材陣の居所も指定されていたもようである。実際の戦闘場面は遠方から見ることが出来たに過ぎないらしい。そのため、戦闘場面を描くには想像力を働かせる必要があったと考えられる。

黒田の《二龍山砲台突撃図》は実見していない戦闘を描いているのであるから、当然、想像ないし他の視覚的資料をもとにしたものであろう。土煙などによるぼかしの効果で場の雰囲気と動きを表そうと試みているが、作為的な印象を拭えない。

日本近代の戦争画と呼ばれる作品群について、写実と記録にこだわる作家たちと、劇的な演出を加えて絵を作り出す作家たちとでは作風が大きく異なることが指摘されているが、黒田の描く戦争関係の作品は、前者に組するように思われる。

裸体群像を風景の中に配して、画家の創造した理想的情景を、あたかも実際にあるかのように描き出すことを画家のしごとと考え、自らも努め、公にも推奨した黒田であるが、自ら納得のいくそうした作例を残してはいない。その底流をなす、ある意味での構想力のなさが、《二龍山砲台突撃図》のような戦闘図にも見られるように思われる。

註

（1）林政武『緑地帯』（北國毎日新聞社　一九四一年）
（2）『黒田清輝日記』第一巻（中央公論美術出版　一九六六年）
（3）『黒田清輝日記』第一巻（前掲）
（4）『黒田清輝日記』第三巻（中央公論美術出版　一九六七年）
（5）同前
（6）黒田の描くユリについては、拙稿がある（「黒田清輝と白百合のイメージ」『視る』二五九号　一九八九年一月）。
（7）「黒田清輝と日清戦役」『美術研究』八十八号　昭和十四年四月、「黒田清輝と日清戦役」『近代日本美術の研究』（大蔵省印刷局　一九六四年）
（8）布引丸事件関係の文献としては、黒羽茂「いわゆる布引丸事件」『史学雑誌』七十一号（一九六二年九月）、黒羽茂「フィリッピン独立運動と布引丸事件―外光秘史―太平洋をめぐる日米抗争史の断面1」『論争』四巻十一号（通巻二十号）（一九六二年十二月）、木村毅『布引丸―フィリピン独立軍秘話』（恒文社　一九八一年）などがある。林政文略歴もこれらによる。
（9）『黒田清輝日記』第二巻（中央公論美術出版　一九六七年）
（10）林政文から黒田宛書簡一八九五年九月二十三日「麹町区永田町　黒田清輝様　林政文」裏「左之処へ移転致候間御知らせ申上度候　閑暇之節御来遊奉願上候　明治二十八年九月二十三日　本郷区森川町一番地表北裏六十九号」
（11）『黒田清輝日記』第二巻（前掲）
（12）同前
（13）林政文から黒田宛書簡一八九六年六月十一日「東京麹町区永田町　黒田清輝様　台湾基隆　支局隣　廣瀬方」「去る九日此地へ着船致候　不相変無事ニ候間御安神下され度　此秋帰国再会之折を楽し居る義ニ御座候　六月十一日　林政文」

（やまなし　えみこ　企画情報部近・現代視覚芸術研究室長）